

書物自身が創造的なものであるばかりでなく、  
読書もまた創造的な行為である。

藤本由紀夫「四次元の読書」2001年

ただ見るだけの作品は、ここにはひとつもありません。  
ここは美術館にある、読書のための空間です。

国立国際美術館の地下1階には、展覧会のカタログや美術に関する図書をだれでも自由に閲覧できる「情報コーナー」があります。「情報コーナー(Media Corner)」はその名称から明らかなように、図書だけではなく美術をめぐるさまざまな情報の公開を目的として、2004年、美術館の中之島への移転にあわせて設置されました。

「アート／メディア四次元の読書」はアーティストの藤本由紀夫とともに、美術館に併設された図書コーナーの新しい楽しみ方を探る試みです。およそ1年間にわたり続けられるこのプロジェクトでは、「読書」という行為を軸に、これまでにない読書のあり方も視野に入れながら、3つの会期ごとに異なるテーマで、美術と美術をめぐる情報(メディア)の関係について考えます。

ここでいう「読書」とは、単なる書物を読む行為にとどまりません。たとえば、書物を手にとったときに感じる重さや肌触り、紙面に目を走らせるスピードが生み出すリズム、本の内部に身体が入りこんでいくような感覚、これまで知らなかった世界を知ること、これらは読書体験で得られる特徴的な要素です。そして、このような平面(二次元)である書物に対する時間的・空間的ひろがりをもったアプローチは「四次元の読書」ということもできるでしょう。

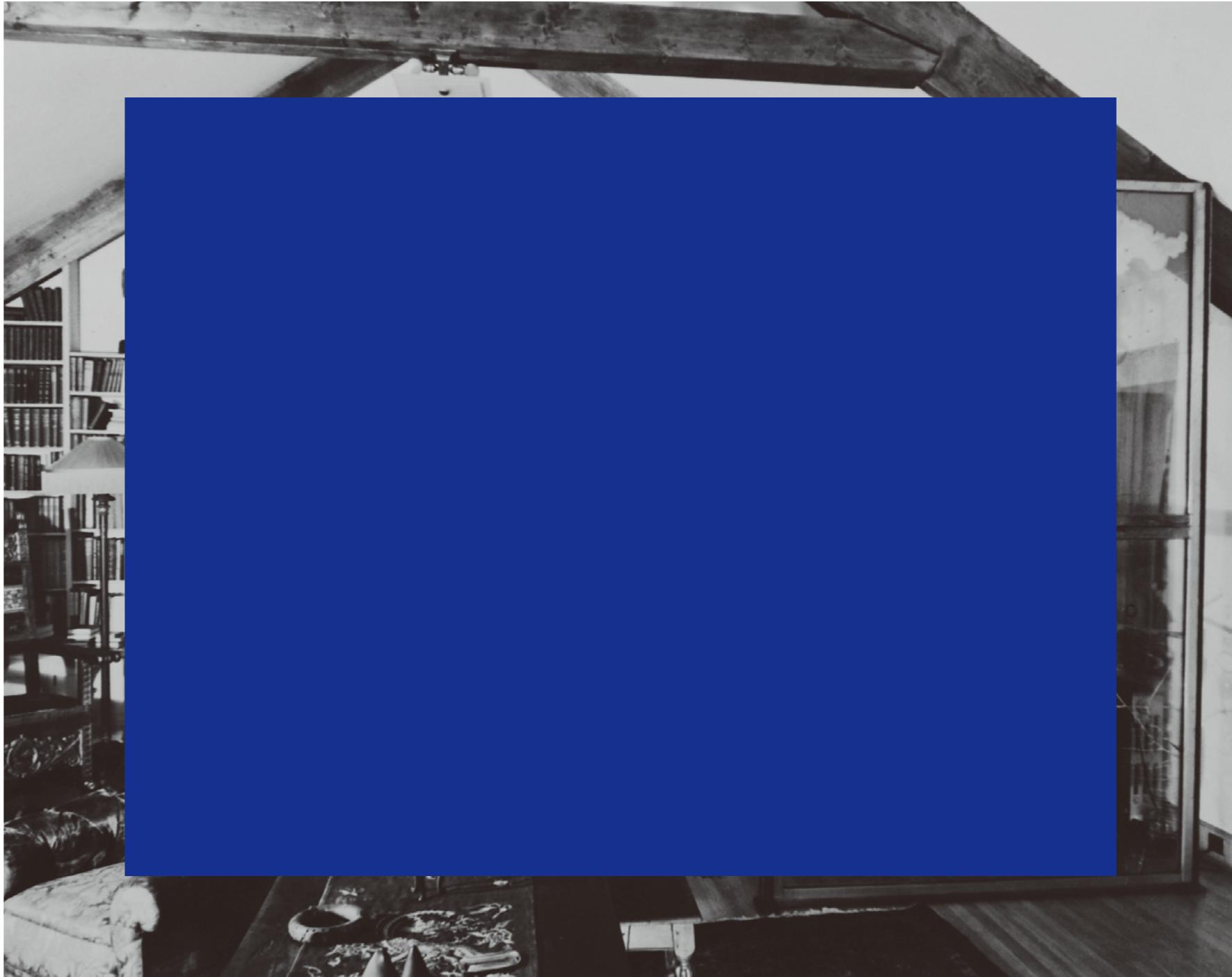
1960年、モノクロームの画家として知られるイヴ・クラインは「人体測定」と称する作品の公開制作を行いました。これはクラインの指揮によって、クライン作の單和音と沈黙から成る楽曲をオーケストラが演奏する中、裸体の女性たちが青い顔料を塗りつけた自らの身体を壁や床の紙に押しつけてその形を写し取るというパフォーマンスでした。そこで第二期では、音・文字・グラフィックの関係を検証するプロジェクトphono/graphとともに、「見ること」「聴くこと」の今日的展開をさまざまな角度から読み解きます。そして、第一期でのマルセル・デュシャンに対する読解を引き継ぎながら、クラインの青の世界に身を浸しつつ、「音」という形のないものに「読書」を試みます。

(楠本 愛)

マルセル・デュシャン／ロベル・ルベル  
『マルセル・デュシャンについて』版下用写真資料より  
『キャサリン・ドライヤー宅 ニューヨーク、1937年』  
1957年以前(撮影:1937年) 国立国際美術館

Art/Media  
Reading to  
Another Dimension

## phono/graph sound, letters, graphics



アート／メディア四次元の読書  
第二期 phono/graph—音・文字・グラフィック—

国立国際美術館 情報コーナー  
2017年10月28日–12月24日

主催：国立国際美術館、ダイキン工業現代美術振興財団  
協力：神戸アートビレッジセンター

公益財団法人DNP文化振興財団  
DNP Foundation for Cultural Promotion  
[333] [666] [◆◆◆▲]

企画・編集：phono/graph、中井康之(国立国際美術館 学芸課長)、  
楠本 愛(国立国際美術館 研究補佐員)

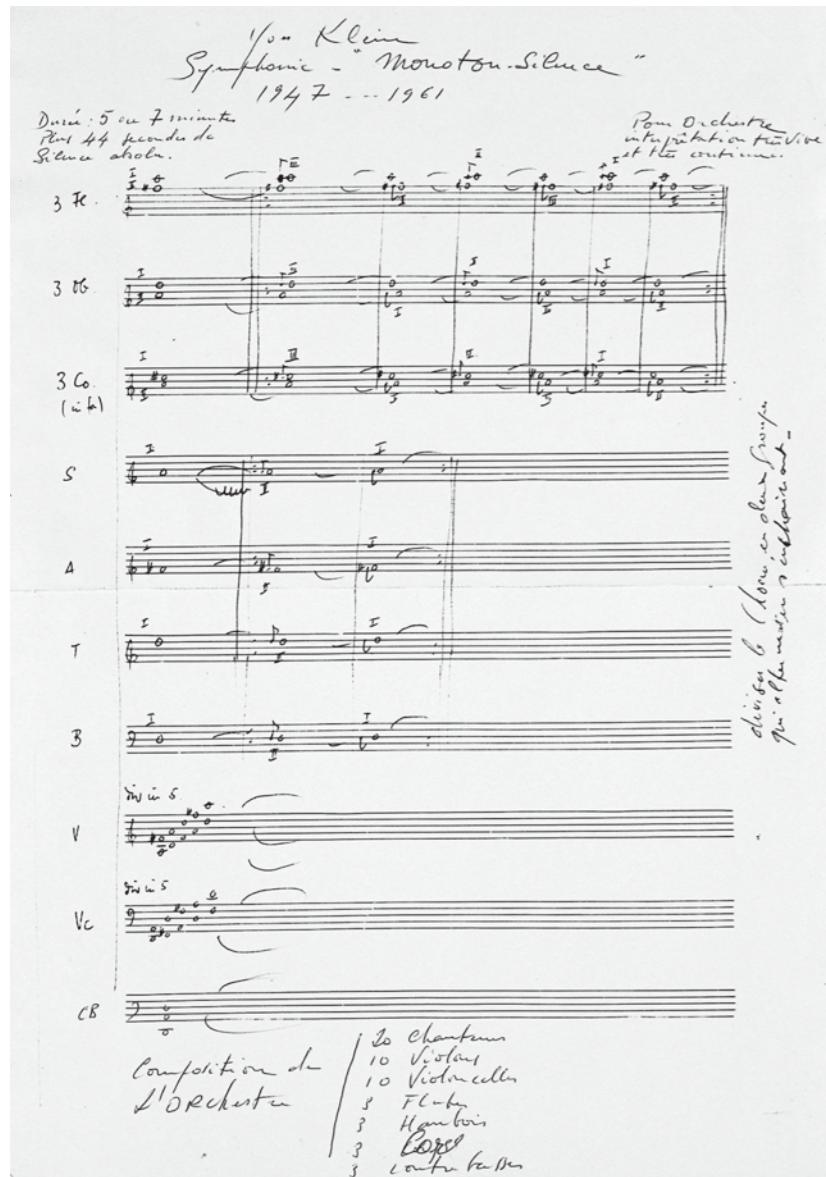
デザイン：鈴木大義

印刷：株式会社ライブアートブックス

発行：国立国際美術館

©2017 The National Museum of Art, Osaka

[国立国際美術館 開館四十周年記念事業]



## イヴ・クラインのサイレンス 藤本由紀夫

モノクロームの絵画で知られているイヴ・クラインに「Symphonie monoton-silence」という音楽作品がある。1947年に構想されたこの作品は二つのパートから構成されている。一つは一音を変化させることなく持続して演奏することとなるパートで、これは彼の絵画と共にしたもので、絵画作品を聴覚によって表現するものとしてよく理解できる。ただ一音がひたすら長く持続するという作品であったならば、それほど驚くものではないが、二つ目のパートが「無音(silence)」で構成されているところに、鍊金術師イヴ・クラインの本領が發揮されている。

「Symphonie monoton-silence」は、20分の持続音と20分の沈黙からなる40分の楽曲である。ここでは「音」と「沈黙」が同等に扱われているだけではなく、鳴り響く音はどうもその後の沈黙への導入部のように思われる。

1958年にパリのイリス・クレール画廊で開催されたクラインの個展「空虚(The void)」では、インターナショナル・クライン・ブルー(IKB)で印刷された案内状や、画廊への途中にIKBで塗られたものを配置しながら、画廊の中には何もない、真っ白な空間を作り上げた。これはまさに、「Symphonie monoton-silence」の構成と同じである。

1962公開のガルティエ・ヤコベッティ監督の映画『MONDO CANE(世界残酷物語)』で正装のクラインが指揮をし、「Symphonie monoton-silence」の演奏が始まり、パフォーマンスを行うシーンを見ることができるが、その試写を見て憤った彼は心臓麻痺に襲われ、数日後に死去了した。一説には、「Symphonie monoton-silence」が始めのところしか流されず、すぐに甘い音楽に変わってしまったことが原因であると言われている。ちなみに、ジョン・ケージの「4'33"」は1952年の作品である。

## Recording of phono/graph

### Interview with Chikako Tatsuuma

phono/graphには、これまでメンバーとして名を列ねてこなかったが、2011年に藤本由紀夫と展覧会を立ち上げて以来、その展覧を見届けてきた人物がいる。今回は辰馬知佳子氏への聞き取りから、phono/graphの歩みを振り返った。インタビューの書き起こしとは、さしづめ「音」から「文字」への変換を介して、誰かの記憶を別の誰かが記録する行為と言えるだろう。



### phono/graphの成立

サウンド・アーティストである藤本由紀夫さんの作品に初めて触れたのは、1990年の「屋上の耳」展(児玉画廊、大阪)で、藤本さんの作品と活動に以前から興味を持っていました。藤本さんがライフルワークとも言っていた「一日だけの展覧会」(註1)が終了してから数年後の2010年春頃、私が企画に携わるdddギャラリーでの展覧会を打診しました。

dddギャラリー(註2)は大日本印刷株式会社が設立したグラフィックデザイン専門のギャラリーですが、同社が藤本さんの「四次元の読書」展を2001年に福島県のCCGA現代グラフィックアートセンターで開催したご縁もあり、本展が実現しました。

驚いたのは、同年秋の初回打ち合わせで配られた資料に既に「phono/graph」のロゴタイプと「音・文字・グラフィック」というコンセプトが記されていたことです。エジソンが蓄音機に付けた名前がphonograph[phono-graph(音の-記録)]ですが、音を記録する装置として最も古いのは1857年、フランスのレオン・スコットという人が発明したphonograph[phono-auto-graph(音の自動-記録)]だと言われています。

スコットは印刷技師で、エジソンが音の記録及び再生にこだわったのに対し、スコットは目に見えない音をいかに視覚的に記録するかということだけにこだわっていたことが、phono/graphというタイトルを思いついたきっかけだそうです。

註1 1997年から2006年までの10年間、毎年一日だけ西宮市大谷記念美術館で開催された「美術館の遠足」展。  
註2 現京都dddギャラリー。公益財団法人DNP文化振興財団が運営。  
註3 phono/graphのWebサイト[phonograph.jp]で全文公開されている。



[fig.2]

### phono/graphの展開

phono/graphが現在も活動を継続しているのは、ドイツのドルトムントで開催された2回目の展覧会[fig.2]がひとつのきっかけになっているかもしれません。この展覧会の企画構成にはデュッセルドルフ応用科学大学とドルトムント応用科学大学の教授と学生が関わっていて、授業の一環として行われた約1年間に及ぶ学生とメンバーの対話が展覧会のベースになっています。今でも、展覧会の準備段階で繰り返し行われるミーティングだけでなく、会期中のメンバーによるパフォーマンス・イベントなど、同じ時間や空間を共有することを、メンバーは展覧会そのものと同じくらい重視しているようです。

ドルトムントの展示で特に印象に残っているのは、藤本さんの《Broom》です。この作品は、かつて石炭の町として栄えたドルトムントの展示室の床に石炭を敷き詰めてレコード盤をかたどり、来場者がその上を歩くときに生じる音を体感するというものです。古くからドイツの経済を牽引してきた街も、その後炭鉱は廃坑となりました。そのような同地の歴史が刻み込まれた対象を踏みしめるという行為は、藤本さんだけではなくphono/graphのメンバーたちにとっても、場所を移してプロジェクトを続けることの意味を見出す一因になったのではないかと思います。その後2015年の神戸アートビレッジセンターでは、会場近くに競艇の場外発売場があることから、舟券を用いた《Broom》が発表されました。

また、2013年には名古屋芸術大学よりphono/graphが客員教授として招かれ、学生とワークショップ、展覧会を通じての交流がありました。京都のMEDIA SHOPでは、美術・デザイン書店の本に囲まれ、2日間のみの展示とパフォーマンスが繰り広げられました。2014年のギンザ・グラフィック・ギャラリーでの展示では、大日本印刷株式会社の活字の倉庫を見学して、各自の新作の制作に繋がりました。

### phono/graphと記録(graph)

phono/graphの活動の特徴として、各展覧会の記録集を制作していることが挙げられると思います。形に残らないワークショップやパフォーマンスも、紙というメディアで記録(graph)し続けています。各主催者の理解と協力がなければ記録集の制作はできないのですが、メンバーにグラフィックデザイナーが数人いるのも大きいと思います。紙、アナログなものにみなさん興味を持ち続けています。

また、phono/graphのメンバーについて言えるのは、特に役割分担はなくそれぞれの存在や仕事を尊重しつつ、各々のフィールドをつなげていくような役割を各自が果たしています。時には作品を共同制作したり、展覧会を重ねるごとにいつの間にかメンバーが増えたりします。告知物のデザインも毎回かなり凝りようで、デザイナーもあ・うんの呼吸で誰が担当するのが決まります。phonograph.jpのウェブサイトもいつの間にかできてきて、常にアップデートされています。

この運動体における藤本さんは、サウンド・アーティストとは異なるフェーズで活動しているように見えます。藤本さんは、デザインと美術の中間領域でその両方に関わりを持つとする作り手たちを呼び寄せることによって、これまでおそらく存在していなかったフィールドをつくり出したのではないでしょうか。そして、phono/graphというプロジェクトは、こうした自由なフィールドがあるからこそ、特に目標やゴールを決めずとも、これからも続していくのではないかと思うのです。

(インタビュー・文責: 中井、楠本)

### phono/graphの活動記録:

phono/graph 大阪 | dddギャラリー  
2011.1.18-3.9

phono/graph ドルトムント | Dortmunder U  
2012.9.8-10.21

phono/graph 名古屋 | 名古屋芸術大学 アート&デザインセンター  
2013.11.5-11.13

phono/graph 京都 | MEDIA SHOP  
2013.11.23, 24

phono/graph 東京 | ギンザ・グラフィック・ギャラリー  
2014.5.9-5.31

phono/graph 神戸 | 神戸アートビレッジセンター  
2015.3.21-4.12



各展覧会で制作された広報物と出版物